



Title	直示と参照に基づく日本語助詞「は」と「が」の考察
Author(s)	山下, 好孝
Citation	国際広報メディア・観光学ジャーナル, 30, 91-103
Issue Date	2020-04-15
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/77571
Type	bulletin (article)
File Information	08_yamashita.pdf



[Instructions for use](#)

直示と参照に基づく日本語助詞 「は」と「が」の考察

北海道大学高等教育推進機構国際教育研究部 教授
山下 好孝

Reanalysis of WA and GA from Deictic and Contextual Points of View

YAMASHITA Yoshitaka

Two types of perspective for analysing Japanese sentences are proposed: the insect's eye view and the bird's eye view. The insect's eye view produces neutral descriptive sentences:

- 1) Sora-ga aoi.
- 2) Tonneru-wo nukeru-to, yukiguni datta.

The bird's eye view produces sentences with explanatory or universal implications:

- 3) Sora-wa aoi.
- 4) Tsuki-wa michitari kaketari shimasu.

In previous studies I proposed the deictic and contextual points of view for analyzing Japanese sentences. The former corresponds to the insect's eye view and the latter to the bird's eye view. Japanese sentences with topic noun phrases followed by the particle WA are contextual because these topic phrases must refer to the foregoing discourse or the situation around the utterance. In contrastive contexts a phrase with the particle WA co-refers to another contrasting phrase:

- 5) Biiru-wa nomanai Yuri mo wain-nara nomu.

In this article a third type of WA sentence is discussed:

- 6) Soko-ni boku-wa ita.

In this sentence the noun "boku" is neither topical nor contrastive. This sentence also describes the situation from the bird's eye view. I propose that this type of sentence takes its utterance frame as its point of reference.

abstract

1 はじめに

日本語学、日本語教育において「は」と「が」の違いの考察は永遠のテーマのように思われる。特に助詞を持たない言語を母語とする日本語学習者を相手にした場合、次の二文の違いを説明するのはなかなか骨が折れる。

- 1) 空は青い。
- 2) 空が青い。

日本語教育の立場から、佐々木（2018）は次のような説明を与えている。

3) ●「は」は説明文

- ・月は満ちたり欠けたりします。
- ・ハチは手出しをしなければ刺しません。

それに対して「が」はどうでしょう。「月が^が出た」は描写文、「アイスクリームが^がとけちゃう」は現象文（どんな現象が起きているか）です。

●「が」は描写文と現象文

- ・新幹線が^がホームにすべり込みました。かつこいい！
- ・お腹が^がすいた。腹ぺこだ。食事を知らせるベルが^が鳴る。

佐々木（2018：93）

正確に書くと、「は」を含む文は説明文であり、「が」が現れる文は描写文、または現象文になるということである。日本語初級の学習者には上の程度の説明で充分なのかもしれない。しかし以下の文に出てくるような「は」や「が」はどうであろうか。

- 4) ビールは飲まない由利もワインなら飲む。
- 5) 私が^が大阪出張に参ります。

4) に生起する「は」はいわゆる「対比の『は』』と言われるものである。それに対して 1) の説明文に現れる「は」は「主題の『は』』と名付けられるのが普通である。5) の「が」は次のような文脈に現れる「総記の『が』』もしくは「排他の『が』』と言われるものである。

- 6) 社長：誰が^が大阪出張に行ってくれる？
社員：私が^が大阪出張に参ります。

佐々木（2018）で説明されている上記の「描写文、現象文」の「が」は「中立叙述の『が』』と称されることもある。

本稿は山下 (2016a)、(2016b)、(2017) で提起してきた「直示」と「参照」という観点から助詞「は」と「が」の違いについて考察することを目的とする。「は」と「が」について述べられてきた多くの研究について言及する余裕はないが、新たな観点でこれらの助詞の違いについて考えることは充分価値のあることであるとする。

2 旧情報と新情報 (既知と未知)

先行研究のいくつかで「は」と「が」の違いは、それらに前置される名詞句が旧情報になるか、新情報になるかという観点で説明されている。例えば、原沢 (2012) がそうである。

7) 月はきれいだ。

8) 月がきれいだ。

原沢 (2012 : 150)

原沢 (2012) では上記の文を次のように説明している。

9) 主題化される「月」は一般論の「月」という意味で誰でも知っている情報 (旧情報) であるのに対し、主題化されていない「月」は今見ているその瞬間の「月」であるということから、聞き手にとっては新しい情報 (新情報) になるわけです。したがって、「は／が」の使い分けにおいては、この「旧情報」と「新情報」が重要なポイントとなるわけです。

原沢 (2012 : 153)

そして昔話の「桃太郎」の冒頭の部分を引用し、以下のような練習問題で「は」と「が」の違いを解説する。

10) 昔々、ある村におじいさんとおばあさん () 住んでいました。ある日、おじいさん () 山へ芝刈りに、おばあさん () 川へ洗濯に、行きました。

原沢 (2012 : 153)

この練習問題の最初の () には「が」が入る。「おじいさん」と「おばあさん」が物語に初めて登場したため「新情報」を担うからだとして原沢 (2012) は説明する。そして後続の () には「は」が入るとする。すでに登場した名詞句は「旧情報」であるためだと説明している。

さらに、この物語を英訳すると、それぞれの名詞句は次のように翻訳されるとしている。

11) おじいさんが → an old man

12) おじいさんは → the old man

原沢 (2012 : 154)

一見、この説明は妥当性があるように思える。しかし、次の文ではどうであろうか。

13) お兄ちゃんが算数を教えてあげるね。

原沢 (2012 : 95)

この文の「お兄ちゃん」というのは、発話者自身であり、聞き手にも知られた存在である。この「お兄ちゃん」が未知の「新情報」であるという説明は説得力がない。次の会話の「が」でマークされる名詞句はどうだろうか。

14) 社長：留守中、誰か来た？

社員：川端さんという方がいらっしゃいました。

15) 社長：留守中、誰か来た？

社員：川端さんがいらっしゃいました。

14)の「川端さんという方」であれば「新情報」であるという説明は納得が行く。しかし15)の「川端さん」は話し手も聞き手も知っている人物であり、「新情報」という説明は納得し難い。結局、文全体が「新情報」を担っており、そこに現れる「主語名詞句」は「が」でマークされるということなのだと思う。ある名詞句が「新情報」を担うというのは定義が難しい。一方、ある名詞句が「旧情報」すなわち既知の情報を担うというのは、いくつかの場合に分類でき、定義は容易であると思われる。

野田 (1985 : 31) では既知の情報を担う名詞に関して次のような説明がある。

16) 相手が知っている次の (a) (b) (c) のような名詞が主語にあつて、その主語について、相手に伝えたいことを述部で述べる文では、主語に「は」をつける。

(a) 「私」「これ」など、目の前にあるものを指す名詞

例 私は 今月の末までにこの論文を仕上げなければなりません。

〔～について〕 〔相手に伝えたい部分〕

(b) 前に出てきた名詞

例 日本でいちばん大きな湖は琵琶湖です。

琵琶湖は 京都府の東の滋賀県にあります。

〔～について〕 〔相手に伝えたい部分〕

(c) 前に出てきた名詞と関係のある名詞

例 これは去年出た新しい国語辞典です。

この辞典の収録語数は 約6万語です。

〔～について〕 〔相手に伝えたい部分〕

要するに「旧情報」に関しては定義が可能だが、ある名詞が担う「新情報」ということは説明が十分にできないのである。

歴史の学術書などでは、初めて出てくる人名にも「は」をつけて提示することがある。このような表現は、歴史の背景知識を持っていない読者には非常に理解しにくい。

17) 藤原百川をはじめ、藤原永手や藤原良継は、文室浄三や大市（ともに長親王の子）という天武系元皇親を推した右大臣吉備真備の意見を退け、宣命を偽作して、天智天皇の孫にあたる白壁王を立てて皇太子とした。

倉本一宏『内戦の日本古代史』講談社現代新書 p168

また、本来は「新情報」として提示すべき内容が、文の中で旧情報に変質してしまっている例もある。

18) その際、壬申の乱後の処分において、右大臣中臣金と各戦線における実戦の将のみ八人を極刑に処し、他の近江朝廷首脳を比較的軽微な処罰に、群臣層や実務官人を不問に、それぞれ処するという、きわめて政治的な決着をおこなった点は、特筆すべきであろう。

倉本一宏（上掲書） p125

この文は、名詞「点」までを修飾する文で、一つの完結した情報を提供している。その意味で、「新しい情報」を含むと考えられる。その情報を提示した上で文を終了し、そして「この点は特筆すべきであろう」と続ける書き方に変更した方がいいと思われる。つまり「は」でマークされる「主題」となる名詞句（この場合「点」）を、唐突に導入するのではなく、読者、聞き手に十分な情報を前もって与えてから導入すべきなのである。

次節ではいわゆる「主題」を表す「は」について考察を進める。

3 参照表現としての主題

主題 (topic) というのはまず文の先頭、もしくは先頭近くに置かれ、文の後続部分から一旦「断絶」する。そして、後続部分と意味的な関連を持つ。堀川 (2012) はそれらを「断絶要件」「意味要件」と名付けた。

19) 新聞を読みたい人はここにあります。 堀川 (2012 : 119)

この文で「新聞を読みたい人」の部分が「主題」、以下の部分が「題述」、もしくは「説明」の機能を持つ。主題に関しては、それは主節の要素であると考えられ、従属度の高い従属節中では生起しない。

- 20) 新聞を読みたい人はここにありますので、ご自由にどうぞ。
21) *新聞の読みたい人はここにあったら、自由に読めるのだが。

「*」の記号は、この文が非文法的あることを示す。

理由を表す「ので、から」の節では主節とは別に主題を立てることが出来る。理由を表す節は、従属度が低い、つまり独立性が高い節で、丁寧体の文も生起する。一方、条件を表す「たら、れば」のような節内では主題の生起は許されない。これは従属節の独立性が低いためだと考えられる。

主題を含む文は、堀川が説明する次のような表現を発話者がしていると考えられる。

- 22) ある成分を表現上の前提基盤項目にたてた上でいったん切れ目を置き
それと後続の伝達主要部分を結合させるという表現スタイルをとる。

堀川 (2012 : 31)

「は」で表される主題部分は、後続の題述の部分でなんらかのコメントをされることになる。言い換えると、主題は発話上の参照点を形成しているのである。

では、対比を表す「は」ではどうであろうか。対比の「は」は純然たる主題の「は」とは異なり、従属節中にも生起する。

- 4) ビールは飲まない由利もワインなら飲む。(再掲)

「対比」を表すためには、対になる語句が必ず必要となる。上記の文では「ビール」と「ワイン」がそれに相当する。つまり「ビール」と「ワイン」は相互に参照点の機能を担っているのである。その意味では対比の「は」に於いても、参照点を形成しているのである。さらに、後続の部分で、その語句はコメントされている。

- 4') a. ビールは由利は飲まない。
b. ワインは由利も飲む。

対比の「は」で示される語句は、後続部分によってコメントされ、参照点を形成するという点に於いて、主題の「は」で導入される要素と共通点を持つと考えられる。

主題の「は」に関して、前の節の16)で主題となる成分の特徴を見た。その中に「目の前にあるものを指す」ものは主題となると説明していた。

- 23) これは日本製のテレビです。
24) 私は京都の出身です。

ところが目の前にあっても、名詞が主題化されない場合が存在する。

- 25) あのう、これ (*これは/*これが)、つまらないものですが、どうぞ。
 26) あのう、ぼく (?ぼくは)、学生なんですけど、割引がありますか？

「？」の記号はこの文が不自然な文であることをしめす。なお、この点に関しては、中島 (1987) でも同様の指摘がある。

- 27) 名詞文でも話し手の立場からの発言であることが前提とされているから、一人称の代名詞は使わないのが普通である。たとえば自己紹介をするとき、ただ「田中です」という。時に「私、田中です」ということはあるが、「私が田中です」とか「私は田中です」とは言わない。

中島 (1987: 31)

この現象は日本語のコミュニケーションの特異性の観点から後の節で説明を試みようと思う。その前に「か」が生起する文について考察する。

4 直示表現としての「か」

日本語によるコミュニケーションに関しては、熊谷 (2011) が次のような図を用いて説明している。

- 28) 日本語の三項に基づくコミュニケーションモデル



熊谷 (2011) は発達心理学で使われている三項関係で日本語のコミュニケーションは成り立っていると主張する。三項とは「話し手」「聞き手」そして「共有映像」を指す。

共有映像は共同注意 (共有注意、共同注視、joint attention) の対象、つまり共視対象であるとも言われる。この三項関係が成り立てば、共同注意は達成される。しかし、人間の発達過程において、三項関係が成立する以前の、注意共有対象を含まない自己と他者だけの1対1のやりとりは二項関係と呼ばれる。

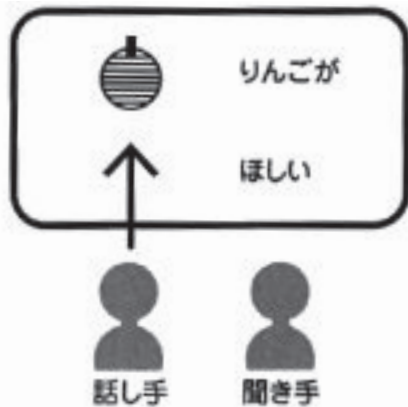
熊谷 (2011) は日本語のコミュニケーションはこの三項関係に基づいて構築されるとする。例えば、二人で話しているとき、次のような発話があった

とする。

29) リンゴが欲しい。

これは共同注意に基づいた発話で、次のように図示される。

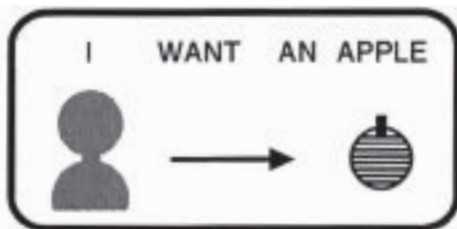
30) 日本語の発話



この三項関係に基づく発話では、「欲しい」という形容詞の主体「私」は表現されない。

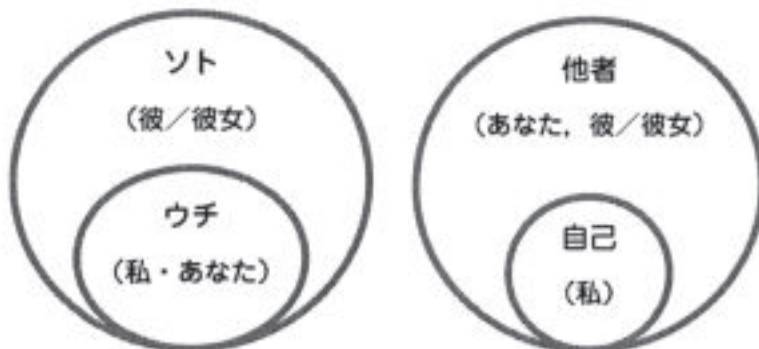
それに対し、英語の場合は、主体はかならず表現される。

31) 英語の場合



熊谷 (2011) はこの違いを、「ウチ・ソト」の言語と、「自・他」の言語の差であるとする。

32) 「ウチ・ソト」と「自・他」



熊谷 (2011 : 127)

すなわち、日本語では「話し手、聞き手」という二項関係に基づく「ウチ」の視点から発話されるのである。そこで「欲しい」と発話されれば発話者がその主体であることが明らかとなる。「欲しいか？」と発話すれば、その主体は自動的に聞き手が主体となる。それに対し、「自・他」に基づく英語のような言語では、単に「want」と言っても発話は明確化されず、必ずその「述語」に対応する「主語」を表現しなければならない。

この点、前述の中島（1987）でも以下のように説明されている。

33) これまで見てきたように、日本語の文は話し手の主観的な叙述文、聞き手との談話という性格がつよく、話の場面や脈絡に依存した省略的表現が多い。これに反して英語は、文の主語を主題とした客観的表現が文をなすので、日本語の文にくらべて場面や脈絡からの独立性がつよく、文形式が整備されている。

中島（1987：188）

山下（2016a）（2016b）（2017）で、直示表現を「発話者の観点」「今」「ココ」「主節」という要素に基づいた、参照点を介さない表現であると規定してきた。発話者を「ウチの人間」に変えると、日本語は「直示的な言語」であると言えよう。その例として、川端康成の「雪国」の冒頭の部分とサイデンステッカー氏によるその英訳をしてみる。

34) 国境の長いトンネルを抜けると雪国であった。夜の底が白くなった。信号所に汽車が止まった。

35) (訳文)

The train came out of the long tunnel into the snow country. The earth lay white under the night sky. The train pulled up at a signal stop.

日本語の方は、登場人物の視点に立って、目に入ってくる情景を、映像的に表現している。それに対し、英語の翻訳では、情景を客観的に表現している。

別の例として、金谷（2019）が挙げている、幸田文の作品「流れる」（1956）の冒頭の部分も見てみる。

36) このうちに相違ないが、どこからはいついついいいか、勝手口がなかった。

金谷（2019）はこの文を次のように説明している。

37) ここでもまた「時間の推移」とともに、主人公が入り口を探しつつ家の周りを行きつ戻りつしているコト（出来事）を表現している文だからだ。この際の作者と主人公と、そして読者が一様に具有する地上の視点を、本書では「虫の視点」と呼ぶことにしよう。

金谷（2019：35）

熊谷（2011）は日本語は映像的な言語だと主張している。そしてその映像は単に発話者、表現者からの観点ではなく、それを聞く「聞き手」、さらにはそれを読む読者を含めた「ウチ」の視点からの描写である。これを金谷は「虫の視点」としている。

森田良行（1988：174）は、日本語の表現の発想は「地面を這って進む爬虫類型、蛇のように前へ進みながら進行方向を適宜変えていく」スタイルであるとしている。つまり、地面から見上げるような視点を提唱されている。このような視点はすべて直示的である。注目すべき点として、助詞「が」は出てくるが、「は」は生起しないことが挙げられる。直示表現は発話者と聞き手を含む「ウチ」の人間側からの表現で、事態をそれが生起するがままに表現する。いわゆる「中立叙述」として、主体は「が」を伴って生起する。一方、英語などの表現は「高みから下界を一気に見下ろす鳥類型」の表現を取ると、森田（1998）は述べている。この種の表現は全体のフレームをまず定め、主題を提起する表現になる。

熊谷（2011）は以下のような例を挙げて「ウチ」の視点からの表現を説明している。これらの例は、「鳥類型の視点」に基づく表現と、「爬虫類型の視点、虫の視点」の表現の違いを典型的に示している。

- 38) 私は彼を見た。 → 彼を見た。
 彼は私を見た。 → 彼に見られた。
 私は彼に言った。 → 彼に言った。
 彼は私に言った。 → 彼に言われた。

熊谷（2012：157）

では、次の節では参照表現の「は」を再度取り上げ、「主題」とも「対比」ともとれない用法について検討する。

5 「神の視点」「鳥の視点」としての「は」

辻仁成氏のエッセイ集に『そこに僕はいた』という作品がある。

- 39) 『そこに僕はいた』新潮文庫



この表題における「僕」は対比としての解釈はもちろんできない。では、これを「主題」と解釈できるだろうか？

堀川（2012）ではこのような「は」の用法は、前述の「主題の断絶要件」「主題の意味要件」を有せず、主題ではないとしている。同様の例として堀川（2012）は次のようなものを挙げている。

- 40) 飲んで騒いで丘にのぼれば、はるかクナシりに白夜はあける。
森繁久弥作詞「知床旅情」
- 41) 松原遠く消ゆるところ、白帆の影は浮かぶ 文部省唱歌「海」
- 42) 岬のはずれに少年は魚釣り 谷村新司作詞「いい日旅立ち」

この「は」の用法について、尾上（1995）は「額縁的詠嘆」と呼んでおり、遠景として場の全体的状況を把握する時に使われるとしている。

このような表現は金谷（2019）が提唱する「神の視点」、森田（1998）の高みから下界を一気に見下ろす「鳥類型」の視点と共通する。

- 43) 「神の視点」
人間が、地上の「己」を離れ、上空から鳥瞰的視点で、眼下に見えるAとBとの行為関係を高見の見物のように傍観的にとらえる立場
金谷（2019：37）

上記の「そこに僕はいた」の文庫本の表紙も、決して「発話者」の視点では描かれていない。「自己」を越えた傍観者的に捉えた描き方がそこに使われている。

では、このような場合、なぜ助詞「は」が使われるのであろうか。

山下（2016b）で、参照表現の中には全体の枠組みを前提とするものがあることを述べた。つまり「全体の枠組み」が一種の「参照点」として機能しているのである。その参照点が想定できなければ、成り立たない表現がある。

44) 昨日、財布を覗いてみると、500円玉一個しかなかった。

45) ?昨日、財布を覗いてみると、500円玉一個だけあった。

45)の例文に、参照点となるべき表現を加えてみると、自然な文になる。

46) 有り金を全部使ったと思っていたが、昨日財布を覗いてみると500円玉一個だけあった。

この文で使われている「だけ」は、全体の枠組みを「参照点」とする参照表現である。

本節で扱われている「は」の用法も、鳥瞰図的な枠組みを前提とする参照表現であると見なすことが出来るのではないだろうか。そして、枠組みを設定するということは普遍的な出来事を示すことと関係する。

よく「は」は普遍的な内容を表す文に使われる。

- 47) 地球は太陽の周りを1年かけて回っている。
- 48) 地球は太陽系第三惑星である。

これらの叙述は全体的な枠組みを普遍的な枠組みと設定して述べた文である。それは必ずしも真実であるという保証はない。よく「は」を使った文は「判断文」とされるが、それはあくまでも話者が設定した枠組みの中での判断である。その意味で「全体の枠組み」を参照点としていると言えよう。

- 49) 神は存在する。

一方「が」を使った文は「現象文」とされる。

- 50) 日本の家の至る所に神が存在する。

これは表現者の目から見た直示の文であるといえる。

以上、この節では「主題」とも「対比」ともとれない「は」の用法について考察を加えた。このいわば第三の「は」というべきものは、発話の枠組みを設定した上で、それを参照点とする参照表現と言えるのではないかとの考え方を提示した。「主題」の「は」も、対比の「は」も、「枠組み」に基づく「は」も、参照表現であるという点で共通点がある。これは「が」の持つ「直示性」とコントラストをなすものである。

6 最後に

本稿は、ウチの人間である「話者と聞き手」、および共同注視の対象を要素とする、三項に基づくコミュニケーションモデルから、「が」と「は」の用法について考察してきた。その考察の過程で中島（1987）の、自己紹介では自分のことを「は」で言及しないとの観察を紹介した。

- 27) 名詞文でも話し手の立場からの発言であることが前提とされているから、一人称の代名詞は使わないのが普通である。たとえば自己紹介をするとき、ただ「田中です」という。時に「私、田中です」ということはあるが、「私が田中です」とか「私は田中です」とは言わない。(再掲)

中島（1987：31）

しかし、自己紹介の文では、夏目漱石の有名な作品にもある、以下のようなフレーズもある。

51) 吾輩は猫である。

また、次のような例も観察している。

52) 私は、このほど北海道一区から立候補させていただきました〇〇であります。

これらの例文は、中島が述べている例が現れるシチュエーションとはかなり異なる文脈で現れるものである。つまり、ウチの人間の「私」「あなた」が相対しているという場ではなく、「一」対「多」、もしくは「一個人」対「聴衆」といった特別な場であると考えられる。このような場面は、三項関係のコミュニケーション内の一人称と二人称というよりは、「ウチ」の人間である「話者」対「ソト」の人間である不特定多数の「読み手」、もしくは聴衆という構図の中でのコミュニケーションであると考えられる。

三項関係に基づくコミュニケーションにおける「ウチ」の二人称と、その関係の「ソト」にいる二人称は区別しなければならない。この問題は、筆者の今後の課題としたい。

参考文献

- 奥津敬一郎・沼田善子・杉本武（1986）『いわゆる日本語助詞の研究』、凡人社
 尾上圭介（1995）『「は」の意味分化の論理—題目提示と対比』、『言語』24巻11号
 原沢伊都夫（2012）『日本人のための日本語文法入門』、講談社現代新書
 堀川智也（2012）『日本語の「主題」』、ひつじ書房
 金谷武洋（2019）『日本語と西欧語』、講談社学術文庫
 熊谷高幸（2011）『日本語は映像的である』、新曜社
 佐々木瑞枝（2018）『知っているようで知らない日本語のルール』、東京堂出版
 森田良行（1998）『日本人の発想、日本語の表現』、中公新書
 中島文雄（1987）『日本語の構造』岩波新書（黄版）
 野田尚史（1985）『日本語文法セルフマスターシリーズ1 は と が』、くろしお出版
 寺村秀夫（1978）『日本語の文法（上）』国立国語研究所
 山下好孝（2016a）「直示と参照に基づく日本語指示詞の再検討」、『国際広報メディア・観光学ジャーナル』23巻、pp51-62
<http://eprints.lib.hokudai.ac.jp/dspace/handle/2115/62975>
 山下好孝（2016b）「直示と参照に基づく「だけ」と「しか～ない」の意味解釈」、『北海道大学国際教育研究センター紀要』20巻、pp93-102
<https://eprints.lib.hokudai.ac.jp/dspace/handle/2115/65698>
 山下好孝（2017）「直示と参照に基づく「前（まえ）」と「後（あと）」の意味分析」、『国際広報メディア・観光学ジャーナル』26巻、pp141-152
<https://eprints.lib.hokudai.ac.jp/dspace/handle/2115/68748>

